



陳言コラム-18

中国雑談

中産階級のアメリカン・ドリーム

スモッグに覆われている北京から、いますぐどこかへ逃げようと思っている人は、どのぐらいいるだろうか。できれば、テレビ、新聞雑誌などが厳しく牽制しているアメリカに行きたい。出来なければ、せめて北京郊外にある「原郷美利堅」村（ネイティブ・アメリカン）でも出かけたがたい。

天安門から 80 キロメートル離れて、北京の北西の延慶県に、米国ワイオミング州の有名なカウボーイ・リゾートタウンのジャクソン・ホールをモデルにしてつくった「原郷美利堅」村がある。赤色警報が発令した日でもそこに行けば、スモッグはそれほどひどくないそうだ。

「米国西部の風景や生活、木造家屋文化」をそっくりそのまま再現しているとデベロッパーは胸を張る。少なくとも町の道や建物にはすべて米国式の名前がつけられ、住民はアスパン（Aspen）とか麋鹿（Moose）、66 号公路（Route 66）などの道路沿いにある大きな庭付きの木造家屋に住み、偉恩堡（フォートウェイン）などの名前のついたレストランで食事をしていることが見える。

原郷美利堅村に住み着いた最初の中産階級の人々はアウディやランドローバーで乗りつけ、トランクにはフランスのワインを満載し、銀行口座には大金がうなっているそうだ。1000 万元住宅を現金で買うことは、八百屋で白菜かににんじんを買う感覚のようだ。

米国訪問経験がない 60 歳の退役軍人は、原郷美利堅村で絵画倶楽部を主宰している。この村には子供会や野球サークルなど 100 を超えるグループがあり、参加費はすべて無料だ。

「ニューヨーク・タイムズ」の記者からみれば、毎週日曜日になると住民の一部が通って礼拝する教会は、なんの教派かさっぱりわからない。でもそれが終わるとフランネルのシャツにスウェット・パンツ、スポーツシューズを穿き、アメリカン・ファッションに身をつつんで近所の倶楽部に集まり、アメリカ式のポーク・チョップやスモーク・サーモン、あるいは現地名産のマッシュルームなどの料理にあふれたセルフサービスの食事を楽しむ。こっちのほうが本場のアメリカには何も遜色はないそうだ。

住民たちはすっかり米国社会に溶け込んだかのように感じているが、米国のジャクソン・ホールをデザインしたアリソン・スミス氏によれば、中国の「ジャクソン・ホール」は本場の雰囲気にはほど遠く、建物もひとまわり小さい。同氏は 2006 年、招かれてこの



村のコンサルタントに就任したことがある。

原郷美利堅村は、中産階級のアメリカン・ドリームを実現したというより、北京のスモッグから逃げられることは間違いない事実だ。デベロッパーは、「一部の住宅は、価値がすでに3倍に高騰している」と喜ぶ。この村は今流行りの住宅の在庫削減とは、まったく無縁のようだ。

陳言 在北京ジャーナリスト

連絡先 : chenyan@seapush.com

微信 : chenyan5931